

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幡ヶ谷九〇四 電話(03)37714649 FAX(03)29915367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

「連合」の弱点をつけ

「連合」の矛盾と弱点(一)

2

「国際国家脱皮実行の年」掲げる日経連

4

臨教審路線と対決する方針案を可決

6

—— 都高教大会から ——

社会党よ、国民とともに歩め

7

資料1 消費税廃止を捨て妥協に

走り始めた幹部の行動に断固抗議する！

11

資料2 田辺、久保報道に関する事実関係

の調査と要請について

12

JR当局のねらいは兵糧攻め

—— 北海道激励交流団に参加して ——

13

『帝国主義』論を読了

—— ソ連・東欧の変化・動揺のなかで ——

14

「労働者階級を中核」として

—— ベトナム労働者と交流して ——

15

読者からのおたより

18

旬刊 社会通信

NO. 442

一九九〇年七月一日

一九九〇年七月一日発行
(毎月一日・二日・三日発行)

■ 巻頭言 ■

「連合」の弱点をつつけ

「連合」の矛盾と弱点(一)

「連合」発足から半年。「連合」をめぐる現在の特徴は、当初から指摘されていた弱点が急速に顕在化し、「連合」内部にもいらいだちがはじめていと伝えられることです。どれほど「連合」の矛盾が深く、広いものかはこれから述べるとおりです。

批判的精神を欠く

その前に指摘しておかなければならないことがあります。それは、「連合」が三振ばかりをくり返すウドの大本であれ、日本の労働運動の四番バッター的位置を占めた以上、全労連の諸君がその典型ですが、「連合」批判だけをバカの一つ覚えのように唱えているだけでは不十分であることです。「連合」が日本労働運動の四番バッターになったことを歓迎しているのは、政府自民党と独占資本だけです。私たちは再び日本労働運動の主軸に座る覇気と準備が、何をおいても必要です。そのためには、「連合」の弱点を大衆運動をつくり攻めることです。

「連合」がいかに「常識」に弱いかは、消費税問題ひとつにも明らかです。当初、「連合」は、消費税に賛成でした。ところが、勤労国民が「消費税反対」の意志を鮮明にするや、「反対」へとひょう変しました。山岸（連合）会長は、ある講演で「社会の常識がすべての政策、運動を考えるものさし」と述べています。労働運動には労働運動の「常識」があるにもかかわらずです。このことは、「連合」が現状批判の精神にいかに関心であるか、もつといえれば現状肯定以外の何物でもないことを自ら告白するものです。

自民、独占資本は歓迎

現在、政府自民党・独占資本は、われわれがそうであるように、第二次世界大戦後はじめてとっていいほどの危機的状況にあります。くわしくは次号から掲載予定の「現情勢とわれわれの任務」を参照していただくこととして、結論だけいえば、資本主義世界体制の基本矛盾の発現が、ソ連・東欧諸国の動揺と崩壊で表面上糊塗されているにすぎないことです。その象徴が「三点セット+α」の矛盾の深化であり、自民党が支持基盤を農村から都市にシフトさせなければならぬ局面に立ちいたっていることです。その意味で、国鉄の「分割・民営化」が「連合」による労働再編成で、総評の壊体をもたらしたように、選挙制度改革は自民党の生き残り政策に他なりません。

この時、政府自民党・独占資本にとって唯一無二の友が「連合」となります。なぜなら、「連合」とともに歩む以外に自民党の支持基盤を農村から都市に移行させることはできないからです。だから、自民そして独占資本の労務対策司令部である日経連は、次のように「連合」を抱擁するのです。

「昨年十一月には八百万人の組合員を擁する労働団体として、官民統一ナショナルセンター（連合）が発足するなど、労働界の再編がなされた。わが党は、こうした労働界の変化に対応した態勢づくりについても積極的に進めてゆく」「友好団体のみならず、従来わ

が党と接触のなかった団体についても、わが党主催の各種会合や団体主催の会合を通じて積極的交流を深め、わが党の理解と協力を求める」(自民党九〇年度活動方針)。

衆院選で自民党支持を機関決定し、財界四団体の統合をもくろむ日経連は、『九〇年版春季賃金交渉の手引き』(「労働問題研究委員会報告」の解説、トラの巻)で、「連合」にこう期待を表明しています。

「高度成長期から安定成長期へと移り、各自の賃金水準が世界のトップレベルになり、組織としての取り組みが必要とされる『政策・制度上の要求』の重要性が相対的に高まっている今日、労働界が統一されたことは、まさにタイムリーであったともいえよう。経営者側にとつては、組織の先行きに不透明な部分が多いという点も含めて、不安な点もあろう」
「何よりも重要なことは『経済合理性に合致した行動に基づく安定した労使関係』を今後も堅持することである」

ここに、日経連の「連合」への期待がすべて語られています。他方、日経連が「連合」に危惧する点は三つです。第一に政党支持問題、第二に組織率の継続的低下、第三に地方統一問題と反連合勢力の存在です。

連合を基礎に支持基盤シフト

政府自民党・独占資本の基本戦略は、「連合」発足とともに練り直されています。まず第一はさきの衆院選挙で明らかとなった自民党一党支配体制の維持延命です。この点について新たな動きは二つです。第一に企業ぐるみ選挙が従来の職制層から組合員層にまでターゲットが広げられたことです。これは「連合」発足なくしては不可能なことがらです。第二に財界四団体が自民党支持を機関決定し、社会党の体制内化攻撃を開始したことです。これも「連合」発足なくしては考えられないことです。

第二は「職場の安定帯プラス政治の安定帯」の基本を国労闘争においたことです。自民党の農村から都市への支持基盤の移行は、「連合」が安体であつてはじめて可能になります。国労闘争が「勝利」すれば、職場の安定帯は一挙に崩壊します。J・R内部で組合員の支持がまったくない、革マルと職制の組合であるJ・R総連は一夜にして壊滅。国労が多数派になることは必至です。この時、「連合」はJ・R総連とともに手ひどい打撃をこうむらざるをえません。こうなれば、自民党の最大戦略「農村から都市への支持基盤の移しかえ」も『平家物語』となるからです。

ここに国労闘争の階級的意義があります。勝利するためには、大衆運動、国民的規模の運動をわれわれの手でつくりださねばならないことです。約十年にわたる国労のたたかいは、この可能性のあることを示唆しています。財界スジからは、「なぜ国労が四万の組織を維持しているのかさっぱり分らない」「清算事業団に千名を超える組合員が残るとはとも考えられないことだ」との声が聞こえてきます。

マルクスやエンケルスではありませんが、これほどのかん難辛苦に耐え、がんばりとおす国労組合員をはじめとする労働者の意気地は、社会主義を再度再生させずにはおきません。しかも、国労支援の声は「連合」傘下組合でも高まることはあれ、低くなることはないのですからなおさらです。

(つづく)

「国際国家脱皮実行の年」掲げる日経連

財界、二つの関心事

日経連の機関誌「経営者」五月号が、日米構造摩擦問題の特集している。この中で企業トップ四三人のアンケートによる回答を掲載しているが、日経連の役員を含めて財界の最大関心事が当面する日米構造協議の行方と、今後の世界経済新秩序の方向に向けられていることを知ることができる。

日米摩擦——日米両国の政治的・経済的利益の対立が、貿易摩擦（六〇年代後半から七〇年代）、技術摩擦（八〇年代）、農業摩擦（八〇年代後半）、金融・サービス摩擦（同）、そしていま浮上している投資摩擦、防衛摩擦に拡大し、さらにリビジョニスト（修正主義）旋風が吹き荒れる「文化摩擦」にまで、それこそ全面的な構造対立に発展している。

リビジョニスト旋風というのは、これまでの日米パートナーという日米に対する認識を、日米敵対関係、日米脅威論という認識に転換させるべきだ、という主張で、最近のアメリカの世論調査にみられる「ソ連の軍事的脅威より、日米の経済力が脅威」という対日感が七割を占めていることなどに反映している。

この背景に日米双方の財界、大企業の利益の対立があることはいうまでもない。対米協調政線を基軸としてきた日本の財界は、いま二つの選択を迫られている。

一つは日米構造（障壁）協議の破綻は、アメリカを管理貿易に追いこみ、日本の対米輸出が激減し、日本経済は壊滅的打撃をうける。この危機を乗りこえるために、アメリカの対日要求（当初二〇〇項目、三月末の『九〇年外国貿易障壁報告書』では一八項をリストアップ）をどこまで受け入れるか。

二つはアメリカの対日要求の背景にあるアメリカの覇権国家として力の後退、さらにソ連の激変という二つの超覇権国家の影響力の後退の中で、日本はいかなる世界戦略をもつて、覇権国の交替過程における摩擦、混乱に立ちむかうか、ということである。

この解答の一つが六月七日に発表された通産省の諮問機関、産業構造審議会の「九〇年代の産業政策——供給重視・経済構造重視を超えて」という報告書である。ここには労働運動にとつても重要な、就業構造の変化の分析や新しい雇用制度の導入が提言されているが、その分析は別の機会に譲ることにしたい。ただ結論部分を要約すれば、企業型社会を脱皮し、経済力に見合った「豊かな生活の確保」のために、社会資本の充実や規制緩和による国際協調システムの確立によって、日本の国際的確立化を防げ、と提言している。八六年の前川リポートの延長線上のものだが、いかにも連合が飛びつきそうな「九〇年代ビジョン」である。

もう一つの解答は日経連第四三回定時総会（五・一六）における鈴木会長の挨拶である。鈴木挨拶は九〇春闘総括もそこそこにいくつかのクレームをつけているが、総資本にとつて満足すべき結果、激動する世界情勢の中で日本の進むべき進路を力説した。財界の今後の世界戦略を示唆する見解として注目したい。

日米構造協議、そして海外進出戦略

強調点の一つは日米構造協議に対する態度である。「世界に貢献するためには、まず迷惑をかけない国になる」ことが必要だとして、日米構造協議におけるアメリカの対日要求を積極的を受け入れる態度を表明している。「アメリカの主張が全面的に正しいといっているわけではない。しかし私は七〇八割は、アメリカからいわれるかどうかは別にして、日本自身としてやらねばならない問題であると思っている」

として、当面具体的に手をつける問題について、①物価の内外価格差解消、②関連して農業の市場開放、③土地問題の解決「土地基本法」の理念の実現、をあげている。このために「経営者団体の役割」として、「構成員の短期的利益を代表する単なるボスでなく、本来のリーダーシップを持ったリーダーでなければならぬ」という持論を展開している。その含意は、アメリカの対日要求を受け入れるための痛みを覚悟せよ、ということだろう。しかしその痛みのスケープゴートはコメの輸入（全面禁止からミニマムアクセスへの転換。アメリカの要求は日本のコメ生産の一〇%、百万トン）と、大店法改正による小売店の切り捨てである。企業トップのアンケートも殆どが、大店法改正、農業の市場開放、公共投資の拡大を主張している。

第二の強調点は、海外進出戦略である。貿易の不均衡拡大を是正するため日本の財界は輸出から現地生産という資本進出を推進してきたが、それが投資摩擦という新たな対立を生み出している現状に立って、その解決を迫られている。

この分野こそ日経連のもっとも得意とするところだ。鈴木挨拶は次のように強調する。「日経連が設立した国際協力センターの活動は軌道に乗っている。アジア各地における経営セミナー、賞金セミナーなど、日経連とアジア諸国の経営者団体との共催のセミナー活動も盛んである。この五月からアセアン諸国と韓国の中堅管理職を日本に招き、日本企業内でOJTの体験学習プロジェクトが始まり、相手国から高く評価されている。こうした活動はすべて、一国経済の発展に、最も大事なものは、優れた経営管理者の育成であるという日経連の基本哲学にもとづくものであり、同時に二一世紀にかけての日本は、アジアの国々と手を携えて共存共栄の中で、ともにレベルアップしていくという基本認識の上に立つものである」

さらに「アジア諸国の経営者団体は、日本の進出企業の参加を熱望している。多くの国々が日本の労使関係を勉強しようとしている。そうした活動に参加することは、短期的にみれば持ち出しになるかもしれない。しかし長い目でみれば必ず日本に対する共感となってはねかえってくる」と、各国経営者団体への参加を提案している。

この経営、労使関係ノウハウの輸出は、東欧各国に向けられている。東欧援助の重要性を指摘したうえで「効果的な支援のあり方は、モノとノウハウ両面の支援であり、日経連にも経営、労使関係についてのノウハウをはじめ種々の要請がきている」として、今秋、東欧調査団を派遣することを明らかにしている。

連合との協力推進が軸

冷戦構造終えん後の新国際秩序はなお不透明であり、アメリカ、ヨーロッパも模索の段階だろう。この中であって、日本の財界は豊富な円マネーをフルに活用して、新秩序の一角に割りこもうと模索を続けている。このためには国内において安定した政治体制と労使関係の確立が不可欠となる。一月臨時総会で社会党攻撃の先頭に立った鈴木会長は、一転して「社会党も最近、綱領を修正し、脱皮を目指していると聞くが、非武装中立論や原発問題など、早期に名実とともに国民政党に脱皮して頂きたい」と期待を表明した。

連合との協力推進は日経連のもっとも重要な戦略の一つである。これをうけて総会後の懇親パーティで山岸連合会会長は「連合と日経連は夫婦と同じで、別れようにも別れられないパートナー。労研報告について賃金、時短を除いて八〇%は賛成できる」と大サービスの挨拶。両者の密月ムードは一層濃密になるだろう。

「国際国家脱皮実行の年」をかかげる日経連である。日米協調の枠組みをこえて世界進出に強い意欲をみせる財界の先兵として、日経連の役割はますます大きくなろうとしている。われわれは新しい覇権国家日本の道を許してはならない。

(二)

臨教審路線と対決する方針案を可決

— 都高教大会、「全教」を指向する修正案は否決 —

東京都高等学校教職員組合（一万二千人）の一九九〇年度定期大会は六月二日、三日の両日、杉並公会堂に一千百名弱の代議員が結集しておこなわれ、日教組との関係を凍結し全教を指向する中立化の修正案や、純粋中立化の修正案をいずれも否決（過半数五四二のところ最大四七七）し、受け入れ修正案をふくむ本部提案の方針がほぼ原案どおり可決された。

都高教方針案では初任研、日の丸・君が代闘争などで臨教審路線と対決することを明確にし、国労の不当労働行為闘争を全力で支援し、労戦にかんしては、職場闘争をたたかわない「全教」、労資協調路線の連合を批判、東京連合に入らず、日教組、都労連に結集して全国統一闘争をたたかうことを提起している。

方針案は日教組の一九九〇年方針案に言及していないが、原案を支持する代議員からも「参加、提言、改革」にたいしては強い危惧の念が表明され、答弁で清水委員長は、「参加、提言、改革も職場闘争を基礎にした全国的なたたかいがなければ実現できるはずもない。また学習指導要領反対のたたかい、国労支援も柱になるべきだ。したがって、都高教としては日教組大会において、これらについて修正案を提出して臨む」と言明。また全労協運動にも都労連をとおりて参加していくと発言した。

方針案はほぼ原案どおり可決されたとはいえ、内には「全教」を指向し、職場闘争をきらうかなりの組合員をかかえながら、ますますきびしくなる職場闘争を進展させることができるかどうか。また外に向かつては、連合傘下の日教組の右傾化を阻止する力になり得るかどうか、都高教一万二千の団結をため、都立高校の民主的職場と民主教育を進展させていけるかどうかの鍵であると考ええる。（西村 昭・都高教南多摩高校定時制分会）

社会党よ、国民とともに歩め(一)

参院選、衆院選で社会党がなぜ躍進したのか。「三点セット+α」が象徴する自民党の央政に、社会党が「ノンノ」と声を高めたからだ。誰もがよく知っていることだ。

だが、最近の社会党幹部の言動は目に余る。「安保、積極面を活用」(山口書記長)、「自衛隊合憲に転換を」(久保副委員長)、「消費税廃止こだわらず」(田辺副委員長)等々。土井委員長を支えなければならぬ人が、土井さんの足を引っ張り合っている。スペインのゴンザレスも、フランスのミッテランも、遠くはドイツの社民党も、時の政権党を徹底的に批判して政権を得た。

社会党の政構研幹部諸氏は、政治がまったくおわかりになっていないようだ。自民党に近づいて政権がとれるとお思いのようだから。

以下は社会党倉敷地域支部の「意見書」の要約である。これからの社会党はいかにあるべきかがコンパクトにまとめられている。全国の仲間を紹介したい。

我が党は、国民からの熱い期待を受け、大きく躍進しました。「消費税を廃止する過程において、また政治を変える過程においても、社会党に頑張ってもらいたい。社会党の主張にこそ耳を傾けるぞ」との意思表示が、倍増に近い議席となって現れていると思います。

そこで、他の野党が総崩れしたにも拘らず、躍進することができたのは何故なのか。教訓とすべき点、今後の闘いに生かすべき重要な課題について、整理しておかなければなりません。

自民党と対決せよ

第一点目——。自民党と対決する姿勢を明確にしなければならない、ということです。このことは、他の野党を見ても良く分かることで、今さら説明するまでもありません。社会党には、自民党と真つ向から対決した歴史があり、基本政策があります。平和と民主主義、護憲、非武装・非同盟中立、そして生活向上、人権擁護の闘いです。これらの闘いは、社会党に集まる全ての議員や党員に、知らず知らずのうちに、毅然とした姿勢を植えつけてきました。

厳しい労働と生活の実態。他方で、大企業の儲けを最優先した自民党の政治。今や国際語となった「ザンギョー」「カローシ」。教育や医療、老後の生活にも、まず金を心配しなくてはいけない勤労者の実態。そして環境破壊、人種差別。これらを目の当りにして、どうして許せますか。どうして世界に誇れますか。しかも、この国民のひどい実態と大企業の利益最優先とは、ちょうど裏腹の関係にある、というのが我々の主張でした。

ところが、かつて社会党には、党に対するさまざまな「思わく」が働き、「物分かりの良い」政党になれば、「政権につけるのではないか」として、基本政策の変更に精力を費やした時期がありました。「大企業にも、公明、民社にも気に入ってもらい」「健全な」体制内野党になることが、社会党に残された唯一の道でもあるかのように、党の幹部が言っ

ておられました。本当にこれが正しかったのでしょうか？

大企業は自民党を精一杯援助したではありませんか。相変わらず、ひどい搾取と老後の不安が続き、国民の大企業に対する憎しみは、増幅する一方ではありませんか。にも拘らず、「物分かりの良し」体制内野党となり、公明、民社と一緒にいたら、彼らと一緒に見捨てられたのではないのでしょうか

そこで、社会党のとるべき道はただ一つ。党の基本政策をキチッと据えた上で、つまり「政界再編成」論議は止めて、自民党の悪政と大企業の横暴にメスを入れること、そして、ひどい事態にさらされている勤労国民を味方として引き付けることに全力を上げることではないでしょうか。

かつてのように、幹部の「思わく」だけで党の路線をいじっては、決して良いことになりません。そもそも、基本政策を変更して支持を得ようというのは、「闘わずして政権をとる」ということであり、幹部自らが「自分には闘う能力がありません。だから、相手の懐に入りませう」と言っているようなものではないでしょうか。いったい誰がこのような人の言葉に耳を傾けるでしょうか。政界再編成や「社公民路線」を唱えるこの種の人が、社会党を混乱させ、余計なエネルギーを消耗させることは、もうコリゴリです。

幸い、我が社会党には、闘う能力抜群の委員長を初め、参議院選挙以降すばらしい議員が誕生しています。地域では、女性や市民グループが「とにかくやってみよう」と参加し始めています。党に対する「思わく」よりも、目の前にある問題を一つ一つ解決し、積み上げていくことがどれだけ大事なことか、彼らは身を持って社会党に教えているのです。このことを、まず党中央本部執行委員から実践していただきたいと思います。

大衆的・国民的な運動を

第二点目——。政党レベルの協議に留まることなく、大衆的・国民的な運動で事態の打開をはかろう、ということです。

「バラバラの野党に政権を渡したら、政治は混乱する」という自民党の攻撃に対して、有効な反撃がなかったことは、非常に残念であり、厳しく総括しなければなりません。

この点、野党、とくに社会党に甘さがあったのではないのでしょうか。公明、民社はそのうち寄ってくると思ったのか、社会党の勢いで国民の不安は払拭できると思ったのか。次の手が全く打たれないで何か月も過ぎたことは、理解に苦しむところでした。野党協議がつまづいたら、すぐさま、国民連合政権構想の具体化に着手し、知識人やマスコミ関係者の協力を得て、全党員、全組織をあげた一大キャンペーンを展開すべきだったのでないでしょうか。

参議院選挙以降、国民の間には大きな変化が見られます。今まで話したこともないような人と話ができ、どんなに仕事が忙しくても、我々の話にキチンと耳を傾けてくれるのです。そして、社会党が何を言うのかテレビに注目しています。

その時、タイムリーな政策を打ち出し、有名人に依頼して、マスコミで発表する。そして、我々が「政策リーフレット」を持ち、市民の中に飛び込み、あるいは自らの持ち場で説明する。国民からの貴重な意見は党に持ち帰り、さらに煮詰める。このような作業を通

じて初めて、国民のなかに社会党の政策が浸透し、拡大するのではないでしょう。選挙後、政策面の充実について、取り組まれることになりました。「影の大臣」や社会党を支持する知識人、党の政策審議会スタッフが、各県本部の会合に出席され、党員や一般市民の声を吸い上げるかたちで、交流することは、党の政策の浸透に大きく役立つことと思います。

大衆の中に入って行く作業を、全党あげて始めようではありませんか。

「反独占」で政策を充実

第三点目——。政策面の充実を急ぐことです。しかも「反独占」の視点を明確にして、国民が納得できるものを作ることが重要です。

「社会党の政策には夢がない」（評論家）

「社会党は期待に比べてくれなかった。」（農業青年）

このような発言を、我々はどうのように理解すれば良いのでしょうか。

参議院で野党が多数を取っているとは言え、社会党が政権を担っているわけではないのだから、社会党に出来ることは限られています。では、政策の充実という点ではどうでしょうか。

早速、我が党の政策集「伯仲新時代へ」（日本社会党政策審議会・広報局、一九八九年三月一日発行）を読んでみました。それぞれの課題について、現在の問題点や社会党の政策が丁寧に説明されています。農業問題についても、穀物自給率六〇%を含めて、多くの提案がなされていました。

しかし、先の農業青年は、こうも言っています。「社会党は、六〇%の穀物自給率を言っているが、現在の状況では不可能に近い。信用することが出来なかった」と。自民党にあれ程までに痛めつけられ、一時は反旗をひるがえした彼らが、社会党の政策は不可能だという。何故、こうなってしまうのでしょうか。これと同じことが、実は国民の意識についても言えるのです。

選挙直前の、「社会党に何を期待するか」というアンケートに答えて、多くの国民が「政権を担当すること」よりも、「自民党政治を監視して欲しい」と回答しているのです。この「自民党政治を監視して欲しい」とは、何も「社会党が政権に就くことを拒否する」という意味ばかりではありません。「社会党に頑張ってもらいたい。しかし、今の力では、政権に就くことさえ難しいのではないか。ならば、自民党政治をしっかりと監視して欲しい」という、現実を踏まえたいうえでの、社会党に対する期待が込められていると思います。

そこで、先の農業青年のように、社会党に期待しながらも「そんな政策は不可能だ」として、最初からアキラメでしまったり、社会党に政権を執ってもらいたいと思いつつも、「あり得ない」として、覚めた目で見ている有権者について、我々はどうのように理解すれば良いのでしょうか。何故、そうなってしまうのでしょうか。

次の二つの理由が考えられます。

社会党への支持を集めるために

まず、第一に、現在の管理支配体制は、余りにも徹底しており、社会党が性根を入れて

かからなければ、その一角すら崩せない仕組みになっている、ということだと思えます。国民は日常の生活からそのように思っているし、加えて、参議院選挙で、あれほど社会党が勝ったのに、自民党の管理支配体制は少しも変わらなかった、という失望感も作用しているのではないのでしょうか。

では、参議院選挙の盛り上がりを受けて、農業青年は社会党に何を期待したのだろうか。社会党の農業政策に確かな展望を見出すことだったのではないのでしょうか。

ところが、中央の政治は、安保だ自衛隊だ、西側の一員だの議論ばかりで、いったい六〇%の自給率という社会党の政策はでうなったのだろうか。「ヨシ、この政策で行こう」という青年が、情熱を持って、自民党の管理支配の一角を突き崩すチャンスであったのに「社会党は期待にこたえてくれなかった」のではないのでしょうか。

そういった意味では、現在の管理体制は、社会党をもガンジ搦めにはしている。その一角を崩すことさえ容易ではない、ということを知り見ているのではないのでしょうか。正に、社会党が性根を入れて頑張らなければ、自民党に勝つことは出来ないのです。

「社会党の政策に夢がない」と言う評論家の言葉からも、我々は学ぶ必要があります。政策を実現する闘い、すなわち要求を貫徹する闘いのないところに、夢も情熱も存在する筈がありません。この望みしそうな管理支配の枠組みを、少しずつでも崩していくところに、本当の意味があるのです。

社会党にとって、党の政策の実現を目指して闘うこと、ひどい目にあっている人々を励まし、その先頭に立って要求を貫徹すること、または、一緒に闘ったという実績が重要、ということではないのでしょうか。

ここで我々は、政策集の九五ページ「不当労働行為の規制」と、三月三一日付けで首切りとなる国鉄清算事業団労働者のことを指摘せざるを得ません。JRに地労委命令（地元JRへの採用を義務づけている）を守らせる闘いを、社会党がどこまで「性根を入れて」実践するか。土井委員長が彼らの家族とともにどれだけ団結して、つらさを分かち合うことができるか。社会党がこれから始めようとする「政策の充実」とは、本当は、こういうことだと思いませんか。いかがでしょうか。

いつも押されっぱなしの社会党が、日常的にも自民党に断固として立ち向かう時、このような時こそ「社会党に政権を担って欲しい」との声が、圧倒的多数になるのではないのでしょうか。

第二に、国民がアキラメてしまうのは、「財源難」という自民党からの宣伝が浸透しているからではないでしょうか。例えば、農業を保護しようとすれば、コメの値段を上げざるを得ない。すると、消費者が納得するはずがない。アメリカからの圧力もあるし、社会党の六〇%自給率の政策なんて「口にすることさえ出来ない」といった、さまざま思いますが、彼ら農業青年の頭をよぎっていると思います。

消費税問題にしても、しかりです。テレビ討論会で、なぜ社会党は「財源はある」といわないのだろうか、と不満を漏らしていた知識人がいました。我々もそう思います。農業を荒廃させてはならないし、福祉の充実、減税など社会党が政権に就いたときしなければならぬことは山ほどあります。すべて莫大な財源を要するものばかりです。農業青年や

多くの国民が、自信を喪失するのも当り前ではありませんか。

そうしたとき、社会党としては「財源はある」と毅然と主張しながら、折にふれて、ヤミカルテルや独占価格、大企業優遇税制や企業献金、ムダ遣いの軍事費などを徹底的に批判するのが重要ではないでしょうか。こうして初めて、ジレンマに陥っていた農業青年も自信がつき、六〇％という社会党の政策に確かな展望を持つことができるのです。展望を持つだけでなく、社会党の運動に積極的に関わることもなるのです。

大企業の横暴の犠牲となり元気をなくしている人々を勇気づけ、自信を持って社会党の政策を推し進めるためにも、社会党の基本姿勢Ⅱ「反独占」の姿勢を明確にした政策を打ち出さなければならぬと思います。

(つづく)

資料1 消費税廃止を捨て妥協に走り始めた 一部幹部の行動に断固抗議する!

日夜、社会党の党勢拡大のために奮闘されている貴職に敬意を表します。
全国大会以降、「政権を担える党」をめざして、あらゆる機関を利用しての論議・研究等の行動については、一定の理解と支持を表明するものです。

しかし、消費税「廃止」については、委員長自らが度々明らかにしているよう「ダメなものダメ」と参議院選挙・総選挙・福岡参議院補欠選挙でも明確にして闘ったように、全国民に対して公約し支持された最大の課題であります。

私は、福岡補選勝利を最大の「武器」に今後の国会闘争を展開していくものと期待していましたが、新聞報道を見るかぎりそのようには成っていないように思えます。

その事は、十五日の新人議員研修会でも「執行部の対応」に対して、多くの新人議員から反対意見が出たことでも証明されていると思います。

新聞報道ですから、どこまで正確であるのかは疑問の残るところではありますが、「十一日夜、都内某所で自民党のドン・金丸信、小沢幹事長と、社会党の田辺誠副委員長の三人が秘に会い、消費税の決着について話し合いました。」とあります。

これが事実であるならば、旧態依然とした密室政治と批判されてもしかたがないと思います。

今、党員や党を支持してきた国民は、このような「対応」をのぞんでいるのではなく、あくまで「絶対廃止」を強くのぞんでいるし、自民党に対し毅然たる態度を期待しているのです。

このような、国民の期待を裏切るような、「密室取引政治」にストップをかけなければ、「政権を担える党」どころか、大きく支持を寄せて頂いた有権者に再び愛想をつかされてしまいます。

もう一度繰り返しますが、「消費税」への怒りは参議院福岡補欠選挙で改めて明確にされました。

この期待に応えるためにも、自民党にスリ寄るような行動は厳に戒め、社会党の国民に公約したことに自信を持って、もう一度総選挙に追い込んででも、『消費税の廃止』を実

現されることを強く望みます。

最後に、全国を駆け巡って、休む暇のない委員長の日常を考えたとき、健康維持・管理にくれぐれも注意され、一層のご健闘を期待するとともに、私も微力ではありますが地域で社会党の党勢拡大のため奮闘することをお誓いして、意見とさせていただきます。

(土井たか子委員長への意見書、大倉治博)

資料2 意見書 本社会党神奈川県本部瀬谷総支部 執行委員長 大倉治博

田辺副委員長の「消費税」問題の自民党幹部との密談 及び久保副委員長の「自衛隊合憲論」報道に関する 事実関係の調査と要請について

日本社会党

中央執行委員長 土井たか子様

日夜、社会党の党勢拡大のためにご奮闘されている貴職に対しあらためて敬意を表します。

さて、田辺副委員長の問題については六月十六日に個人の資格で抗議文を提出させて頂きましたが、この件について、六月二〇日に行なわれた瀬谷総支部執行委員会でも「内容」について追認し、瀬谷総支部として「意見」とすることを全員一致で承認致しました。

また、久保副委員長についても新聞報道によると「自衛隊合憲論」の見解を示したとのことでもあります。

日本社会党は一貫して「自衛隊は憲法違反」とし、この基本的立場で全国各地で運動が行なわれてきましたし、とりわけ『上瀬谷通信基地』問題をかかえている、我が総支部は微力ではありますが、「反安保・反基地・反自衛隊闘争」をその観点で闘ってまいりました立場から言っても、絶対に容認できるものではありません。

田辺・久保両副委員長の行動・発言を見ると、社会党の基本（闘争力）方針を率先して実践すべき立場を大きく逸脱したものであると言わざるを得ません。

したがって、日本社会党中央執行委員会として、下記の内容について早急に対応されることを要請致します。

記

1 田辺・久保両副委員長に関する新聞報道について、その内容の事実関係の調査を実施されることと、その調査内容について明らかにされること。

2 報道内容が事実であると判明した場合は、田辺・久保両副委員長の辞任の措置を即時にとられること。

神奈川県本部からは、多くの中央執行委員を送り出している立場にもありますので、この意見書については六月二十七日に行なわれます、神奈川県本部総支部書記長会議の席上でも「報告」することも申し添えておきます。

J R当局のねらいは兵糧攻め

——北海道激励交流団に参加して——

国労北海道の仲間を中心に、一、〇四七名の国鉄に働く労働者が四月一日付で国鉄清算事業団から首切りされた。北海道での対象者は五二二名であり、うち国労は四五一名と圧倒的な数に上っている。まさしく国労差別であり、たたかう組合潰しを狙って断行されたものであり、そのことは八九年一月二〇日の北海道地労委による完全勝利の救済命令により社会的にも明らかにされた。しかし、J R北海道は他のJ R各社と歩調をそろえ、この地労委命令を完全に無視して本年四月首切りを強行した。

J R当局の狙いは、兵糧攻めでの組合側の闘争放棄にある。国労北海道では三月三十一日の決着に最大の力点をおきながらも、四月以降長期にわたる戦術を練りながら、四月を迎えた。実際に四月を迎えた中で組合員や家族は大きな動揺があり、一週間にはわたって今後の生き方を話し合い、ようやく完全勝利の日まで闘い続ける意思固めをすることができた。

現在一三の闘争団が組織され、四五三名が長期闘争の腹固めをおこなった。

闘争団の意思と行動に圧倒

私は札幌団として、六月七日国労中南信支部青年部長の市川氏と二人で羽田へ向かい、そこで中央共闘会議の仲間と合流し、空路札幌へ向かった。

四時に到着、ただちに駅裏の八重州ホテル会議室で闘争団の仲間と交流会がもたれた。札幌激励団は八四名という多人数であり、一方闘争団は、物資あつ旋等の業務に追われ、数名の対応となり、会議の終了間際に激励団の中からもっと中身の濃い交流をしたいという意見があり、本部が検討することとなった。

その後札幌駅にあるJ R北海道本社前で抗議行動をおこなった。本社前の玄関の上には大きな高性能スピーカー二基が設置されており、これは国労の抗議行動に対抗するため最近あらたに設置されたものとの説明がされた。

この抗議行動は八日の朝と夕方にも我々が参加しておこなわれたが、大変激しく、大型の宣伝カーを玄関前につけ、参加者は玄関を取り囲むように横断幕を何枚も掲げ、集会を開催し最後は本社に向かってシュプレヒコールをおこなって終わる形式で終わるもので、八日の夕方行われたときはJ R側は玄関を閉鎖してしまい、こちら側は玄関前にゴザを敷いて座り込む方法でおこなわれた。全国からの参加者は、自分達の駅頭での行動に参加しているときは、必ず駅助役などの管理者に追い出されており、その経験からしてこのようなことに大変驚いた様子だった。

私も松本駅で助役と何回もやりあい、国労より松本市職労が目の敵にされているようだが、当局者が出て来れないほどは押し込んでいないので、この地の闘争団がいかに激しい意思と行動をしているかを改めて感じる事ができた。

八日の集会のおり、連帯する会の山下事務局長は私のところに来て「激励演説をしてくれ」といわれ、遂に宣伝カーの上に引っ張り出され、演説をぶつはめとあいなってしまった。

元池貝鉄工闘争団の丸山さんが私の前に演説しているとき、突然J R当局のスピーカーが鳴りだした。「駅前での集会を禁止します。警告します。直ちに集会をやめなさい。」等を相当な音量で三〜四分流し、おかげで丸山さんは興奮して大声で、演説するというよりがなりたてて対抗した。

そのあと、私がマイクを握ったので、私もいささか興奮していたためなにをしゃべったのか本人のよくわからない結果となってしまった。
しかし、東京地評が圧倒的な数で他県の参加者がともすればかすみがちな印象であったため、結果としてはよかったと思っている。

支援体制の強化が課題

七日の交流会のおり、提起された「中身の濃い交流」は急遽、八日の午前中の市内観光の時間を二時間ほど大きくことで実現された。これには逆に参加者の一部から不満の声が上がったが、交流後はこの声は全く消え、結果として良い選択となった。

私は三班の仲間九人と国労会館の会議室で、闘争団の小山内班長他二名の方と二時間にわたって懇談交流することができた。

このなかで毎日かかさずチラシを駅頭で配布し、本社前で毎日抗議行動をおこない、その後事務所へ集合し、物資販売作業につく活動が詳しく紹介され、同時に雇用保険の仮給付が切れる七月以降への率直な生活不安や、団結の継続への不安が語られ、我々交流団からもいろいろな質問や物資あつ旋へのアドバイス等が数多く出され、札幌での行動・交流行動の中で最も実りある充実した激励行動となった。

八日の夕方、自治労会館において、北海道激励団が総結集して国労・全道労評センターとともに約七〇〇名が参加して総決起集會が開催された。家族会の木村ちえ子さんの「五年生と二年生の子供も、お父さんがJRにもどって仕事ができるまで、お母さんが家族会活動で留守になっても泣かないで留守番する」といつてくれます」と涙ながらに支援を訴える姿に、会議場最前列に位置して聞いていた私は、頬をつたう涙をとどめることはできなかった。

それにしても全道労評センターはどんな取り組みになっているのか。会議にも議長のかわりに副議長出席だし、組合員も動員がかかっているのかほとんど一人も参加していないし、本気で支援している様子は、闘争団の口からも聞くことが出来なかった。

今後の闘いの困難さと長期化に思いをはせた時、より多くの支援する仲間づくりがなによりも求められている。このようなとき「連合」が全く支援する姿勢にないため、連合傘下の組合員をいかに支援の輪に包み込むかが大きな課題となってくる。

地区評を中心とした支援共闘会議の工夫を凝らした取り組みを考えていきたい。

(松本地区評事務局長 高山芳美)

『帝国主義』論を読了

——ソ連・東欧の変化・動揺のなかで——

『帝国主義』の学習を講師として滝野さんを迎え、五月で終わりました。

中身の理解は、仲間を含め心もとありません。この事を滝野さんに言ったところ、「とにかく一度読んで見ることです」「続けてやるのが大切です」と勇気づけられました。

『帝国主義』の学習をしている時、世界の情勢が目まぐるしく変化しました。それは、ソ連のペレストロイカを初めとし東欧社会主義国の変化でした。

私達は今まで労働運動や地域の運動と併せ、労働者(勤労国民)を中心とした社会主義的生産手段を持たない社会・搾取のない社会・人間らしく生きられる社会＝社会主義社会の建設を目指して運動をしてきたつもりでした。

ソ連・東欧諸国の激変は、学習や国際情勢の認識不足の私達には、少なからず動揺や不

安がありました。この様な情勢の中で『帝国主義』の学習をした意義は大きいと思います。が、理解するまでにはなっていない。しかし、学習を通じ、私達の疑問や不安が討論をする中である程度整理が出来た事も事実です。

私達が学習をするきっかけは、資本の攻撃や労働界の再編、仲間との遊離等、八方ふさがりの状況下「何をやるのか」が不明確になっていた時、とにかく何かやろう、という事で学習を始めました。

以前にも学習らしきものをしてやりましたがレポートもハッキリせず、講師もいなく疑問や不明確な部分も「こんなもんだらう」で済ましていました。結果は、学習がおろそかになり、遠のいて行きました。

このような反省にたち、学習をやるのならきちんとレポートを出し、その場で疑問点やわからない部分を整理するために講師に来てもらった方が良く、ふだん余り古典を読まないで古典学習『帝国主義』をやることになりました。

本格的(?)な学習は初めてであり、レポートも一夜漬けでレポートを作成する、という有様で、講師の滝野さんには済まない思いの一年でした。

『帝国主義』の学習をした感想は、「中身の深さ」です。今度は『労働組合論』(マルクス・エンゲルス)を学習することになっています。

『闘い一生・学習も一生』と位置づけ頑張りたいと思います。(私鉄労働者 田中秋秀)

「労働者階級を中核として」

——ベトナム労働者と交流して——

このたび、社会主義ベトナムへ派遣させてもらった。その行程等については、末尾に付記することにして、早速、強い印象をうけた順に刻んでみる。

「労働者階級を中核にして」この規定を、くり返し口にしたのは労働総同盟の委員長であった。実は、最近、私はとくに、わが社会党に意見をのべるとき、または、ソ・中・東欧問題をとり上げるときに、大変強調してきた規定である。さらに、日本の「左社潮流」が、東欧等から転・移・してきている「社会民主主義」の、一大思想攻撃にさらされ、そして傾斜しつつある今日、この「労働者階級を中核にして」と言う法則に回帰すべきだとのべている真最中でもあった。このときに、ベトナムの労働組合の最高責任者から、同一規定の強調をきいて、満腔からの嬉しさと、改めてマルクス主義の普遍性をナマ身で痛感したところである。「プロレタリア国際主義」(これも使われなくなり、いらいおかしくなってきた)も頭をよぎる。

「核をおさえて拮がりを」なお、委員長はこう肉付けした。「:そして、勤労人民とともに、諸課題と結びつけ、かち取り民族の利益を守り抜く」と。この規定も、国労などで「職場反合闘争を土台に、労戦などの諸課題と結びつけ、強化拡大していく」と言う規定と共質である。「職場反合だ・け・やつとればラチがあく」式の非弁証者に、この委員長の発言を味わってほしいものである。

「党を守り抜く」しかもなお、委員長のプロバガンダ(思想展開)は続く。「われわれ労働組合は、党をしっかり守っていきなさい」と、より真実感をこめてのべられた。どこの工場などとの交流でも、必ず党代表がつつましく控えていた。そして労組員も、党代表を大事に迎えているという印象であった。私は、先哲の「党を腫のように大切にしよう」と言う規定(レーニン)を思い出したりして、感慨を新たにしたりした。なぜならば、日本では、「労働組合が政党を支持すること」は、タブー視しつつあるからだ。「働く者」の組織労

働組合が、「働く者」の政党を支持することは、組織論、運動論のイロハの課題である。敵の方がよっぽど「階級的」である。経団連が自民党へ三百億もカンパしたことを想起せよ！人にはやめさせておいて、自分たちは堂々とやる。これが「敵および敵性」の、常とう手段だ。例えば、国鉄労働者千四十七名のナマ首を切って、自分は全日空の社長に栄転していった杉浦総裁の如きは人間のすることではない。このような事例はたくさんある。

《東欧などのワダチを踏まない》さらに、委員長は、「われわれは、東欧などのように、タガを激しく外すようなやり方はしない。徐々に刷新しドイモイをやっていく」と言われた。この展開は、各種組織の活動家が必ず口にしていた。ソ・中・東欧の体たらくが、ベトナム共産党の警戒心を高めたことは間違いない。そのことは、中央委総会（第八回・三月一二日から何と十七日間にわたって討議）への討論過程におけるリン書記長の「東欧などは、「民主集中の原則」を著しく破り、官僚主義をばっこさせた」「窓を開けるとハエやカも入ってくる」と、思想闘争の強化を決定している（党紙「ニヤンザン」）。

以上の委員長の話をきいて、大賛成であると発言し、とくに「労働者階級中核論」は、唯物論・唯物弁証法・唯物史観に根ざすものと付け加えたら、途中から握手を求めてこられた。非常に身近に感ずる握手であった。

《一つの伝統に一つの民主化》私の「日本労働運動の報告」のあと、総同盟側の報告者が、「労働者は社会の主人公」だから①労働者教育を強めなければならない、②官僚主義打破のために「一つの伝統に、一つの民主化」で、ドイモイを、そして「労働者階級を強化拡大し、社会主義社会を建設しよう」と結ばれた。この報告者は、私が「ソ・中・東欧では労働者教育が不十分であった」と報告したとき、深くうなずいておられた。学習は、いつでも、どこでも一大重大課題である。法則が認識で再生産されるとまともなエネルギーとなろう。

《…無敵万歳ノ再強化を！》ホノイの中心街をいくと、必ず、大横幕が目にとびこむ。五〇メートルおきに何本も張り吊されてある。通訳さんが「マルクス・レーニン主義の無敵万歳ノ再強化を」と訳してくれた。「無敵ノ」に感じ入り、私は「イギなしノ」と応えた。これは、レーニン百年生誕祭もりの一環であった。街の主要カ所には真新しいレーニンのポスターも張られてあった。ホーチミン記念館では、レーニンの写真展が準備されていた。祭ということもあるが、ソ・東欧をはじめ、一体いま世界のどこでこのような「レーニン」の突き出しがあるのか。時あたかも、社会主義朝鮮では「社会主義を継続し、献身していく」との金日成（うわさの世襲などは納得しかねるが）の談話を発表していた（4/18）。

東欧などのあの体たらくの中で、いま「アジア社会主義」と評価がなされている。中国などの立ち直りから、日本の左翼などへの期待がこめられている。とくに、左社潮流、労働派を大はやりの「社会民主主義」から守らなければならない。キイロイ社会主義Ⅱ黄色（おうしよく）インターは、すでに一二次大戦の補完物になり下ったし、試験済みである。

《…すごい、女指導者》すごい、女指導者に会った。南部の主都ホーチミンの近くの街ブンタオに総同盟地本があり、彼女は、その委員長をしていた。組合事務所にはホーチミンの芸術的な肖像があり、左棚には、レーニンの写真があった。後で案内の党员（組合役員。以下同じ）から聞いたが、彼女は、あの抗米戦のときのジャングルの女闘士であり、ベトナム共産党結党時の幹部であり、今でもそうである。一見、全く町のおばさんであるが、会見のとき、テキパキと処理したり、途中で中堅幹部たちを怒りつけたりしていた。彼等はクビをすくめ、委員長にはかなわないよ、という顔つきで片目をつぶったりしてい

た。しかし、女委員長、あくまでも温くやさしいのだ。会談も終り、今度は、組合経営の食堂へ案内、ちよほど昼食どきで、自らお茶はつぐ、おかずを各人の皿へとつてくれる、果物はむく、それはお土産だ…などなど、日本代表団は、この「奉仕」に「参った、参った」…。この間に女委員長は「国際労研の観光団をぜひベトナムへ」をくり返すことを忘れない。国を富みたい、経済を活性化したい、この国を愛する願いからの彼女の大衆性の発揮なのだ。このあと、日本や西ドイツとの合弁会社の建設現場へ案内したり、彼女の言動は正に縦横無尽である。私は、帰りのワゴンの中で、おそろおそろ「ベトナム国歌」を所望した。三秒ぐらい間をおいてから領き、直ちに謳いだした。淡谷ノリ子のような体軀から、♪ドアン クオン ビエトナム デイノノ (ベトナム軍が征くノ) とソプラノが響き出した。そして、ワゴン内の党員たちがこれに和した。私は、涙が溢れて仕方がなかった。早速、歌詞を覚えてもらった。へ心を会わせて国を救おうノノへきびしい道を集中して歩もうノノへわれらは筋道を持っているノノなど…。

私は、ベトナム人民のすばらしさの一面を見た想いであった。フランス軍を、そしてアメリカ軍を南シナ海へ追い落とした底力の一面を感じた。さっきまでの、あの汲めどもつくせぬ大衆性、その胸の指導性、さいごにピリッとして国歌のリード。すばらしいこの統一性。この国には、この女闘士のような指導者が一杯いるのだ。スジは通すので、各国独占、帝国主義からの、いびり、いじめは止まないだろうが、この統一性で必ず「ドイモイ」を成功させるであろう。

〈ベトナムと国労〉 総同盟本部の一党員が、「K O K U R O ノ」を連発した。よく聞くと、労働会館寄附のとき、機関車をもってきたとき何人かの国労幹部がきているのだ。私は、国鉄闘争を話し、「連帯」バッチを贈ったら、この上なく喜んでくれた。私は、ほとんど毎日、報告のとき、「ベトナム人民も国労も幸せになる権利がある」と言っては泣いてしまった。前にいるベトナムの皆さんが、凄惨事業団の労働者の顔とだぶるのだ。

桜井という教授が「ベトナム人の歴史は、「ツツパリ」の歴史とも言える。この「ツツパリ」があつたからこそ、仏・米軍を追い落したのだ」と述懐していた(名簿「ハノイの憂うつ」)。私は、ベトナムも国労も「粘り」で共通面をもっていると思う。いい手はない。「粘り」と言うゲリラ?をやり返けるしかない。

〈大変な慕われ方「ホーおじさん」〉 街には、ホーチミンの銅像、肖像がない。これがまず印象的だ。ホーチミンの大衆性は有名だ。代名詞みたいなものである。インドにおけるガンジー以上とも言われる。しかし、家父長的にしないできたところにベトナム人民のチエがある。だから「ホーおじさん」と敬愛称されている。思えば、ホーチミンは一番古くから、官僚主義を排してきた人であり、ペレストロイカの元祖でもあつたといえる。

そして廟に横たわっているホーチミンもなぜか親しみを感じる。人民とへだてるガラスもないのだ。レーニン廟よりも好印象をもつ。

〈経済の活性化〉 以上を土台に踏まえながら、経済を活性化しようの意気込みは、これ又、もの凄いの一語につきる。街を歩いていると師走の「アメ横」のように賑やかである。各国貿易高も多く、すでに合弁会社は百五社、投資額二十八億五千七百万ドルに達し、コマは百五十万トン輸出している。観光団も各国から来ており、国際労研(岩井章会長)も、ホーチミン生誕百年の九月二日を目的地に旅行団を予定し、経済の一助たらんとしている。国労同様、小さくて、貧しいが、皆で「連帯」の世論を起そう。(佐々木守雄)

注 国際労研・ベトナム労働総同盟第三回交流団。団員小林・五十嵐・佐々木。4/14、24。ハノイとホーチミン市(タイ経由)。正式の団報告は「国際労働運動」七月号。

◆読者からのおたより◆

購読します 先日は購読申し込みをしたところ、さっそく送っていただきありがとうございます。考えていたとおり、内容の豊富さ等は、未熟な私にとって本当にタメになりそうです。しっかり読んで少しでも立派な活動家に成長したいと思います。(宮崎・I)

灰原さんがんばつて 第四三九号、拝受いたしました。いつものことながら、やっぱり教えられます。しかし、今日は灰原さんを「励ます会」のようですが分かって、これがなによりでした。(東京・T)

資料送ります 先日は東京のSさんの意見書を読ませていただきました。迫力あつてすごいですね。倉敷地域支部の意見書を送ります。党内に新人議員を中心にして新しいグループができていますが、党改革がうまく進んでいくかどうか気になるところです。また情報を送ります。(岡山・H)

国労でがんばる いつも情勢分析ありがとうございます。私も国労の役員を担っている一人として、新たな事業団闘争の発表です。情報等の作成に役立たせていただいています。(釧路・K)

看護婦さんのイメージ ある看護雑誌から看護婦さんのイメージというアンケートを百人の方に答えてもらいました。年齢は十歳から七〇歳で入院経験のない方が大半でした。まず看護婦さんを「花にたとえらる」と「にたいしては、一位は「ユリ」でした。背すじの伸びた白衣姿を想像したようです。つづいて二位は「ヒマワリ」。明るい笑顔の看護婦さんとなつています。以下は「スイセン」「ヒナギク」「タンポポ」「コスモス」「カスミンソウ」とさまざまでした。さて、あなたはどんな花でしょうか。もう一問、「看護婦さんってどんな人?」にたいしては、「やさしい人」がトップ。つづいて「たくましい人」。これは看護という目標をもつて生きているということでしょう。その他、「清潔」「まじめ」「勇氣」「涼しい」「冷たい人」等。さて、あなたは? こんな看護婦の見方もあるのです。(みんな)

編集部より 数年前になります、わが女房殿が半年あまり入院しました。テキパキした仕事ぶりに感心させられ、夜勤の多さに驚かされました。労働条件改善が至上命題との印象です。

定員ふやせ 四月二七日の金曜日から毎週金曜日、ATMの稼働時間が一時間延長されて七時までとなり、土曜日は午後五時まで。そのために金曜日の中勤指定と土曜日の日勤指定がおこなわれるようになります。総労働時間数にすると同じ四一時間になるのですが、土曜日に出勤して平日に休みがあつても、小さい子供をもつ親には、保育園が午前中なのでたいへんに困ります。仕事の面でも年休、病休、非番など大方の日が一名欠員の状態になり、労働密度が強くなるのは目にみえています。その上に超勤。これではなんのためか、これからはますますエスカレートし、夜間も日曜日もと、以前のように後戻りをしてしまいうるに思えてなりません。それとともに、人の心も他人にたいするやさしさ、思いやりを失っていきそうです。忙しいとは心を亡ぼすことだそうですから。(日刊・ちゅうたん)

在職死亡 自殺、ノイローゼ、地方行革の攻撃のなか、私たちの職場でも在職死亡、自殺、ノイローゼ、長期病休が増加。ギリギリの状態で定年まで安心して働けるか不安です。「通信」を読み、私なりに反合理化、反革政闘争を職場のみんなとともにがんばりたいと思います。(自治労・T)